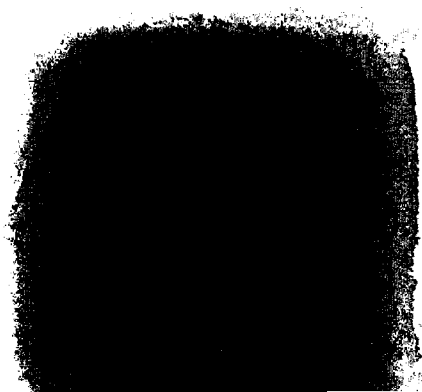


丸山薰
全集
4



丸山薫全集 4



角川書店



丸山薫全集 4

1977年1月31日 初版發行

著 者	丸 山 薫
發行者	角 川 春 樹
印刷者	和 田 彰 三
發行所	角 川 書 店

東京都千代田區富士見
2の13 Tel (265)7111
振替東京 3-195208
東洋印刷・鈴木製本
0395-573104-0946(0)

目 次

小説

城

夢を見ない人

汗の出る話

兩球挿話 (NONSENSE)

落下

蝙蝠館

夢の話

砲彈

エッセイ I

江戸川べり風景

詩の生活

海への郷愁

私の進軍

犬と詩人達

朝

自願自賛

二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十

老年の心理

帰郷の感

芸術と娯楽

夏空に浮ぶ詩情

作家の数学嫌い

元旦の思い出

『新思潮』の頃

鮎と鰯

木の芽どき

日本の悲劇

ライムライト

福寿草の芽

ラジオと季節感

青空学校

灰ふる街

煙草あれこれ

手術雑感

城の在る街と豊橋

十月の味

一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十

伊良湖岬	二〇	雲	一三
私のこわいもの	一〇〇	老優の話	一七
サワラの味	一〇三	コブ牛形注口土器	一四〇
ハズバンド・スサイク	一〇四	好きなものなら	一四〇
酒	一〇六	揺れる	一四一
台所・厨房	一〇八	庭と私	一四一
蠅の話	一一一	収拾のつかぬ自我	一四一
弁当めし	一一三	STARBOARD OR BOARD?	一四一
冬の花	一一五	朔太郎の疑問	一四一
調理のモラル	一二七	ラインライト号	一四八
海の魅力	一三〇	向日葵は西洋人よりも背が高い	一四九
生むは難し	一三三	エッセイ II	
思春期のこえ	一三四	大島の娘	一五三
私の新年	一三七	山のたより	一五五
コッテ作 プルターニユの老婦	一三六	田んぼの案山子	一五七
鳥 群	一三九	春来るまで	一六〇
すどうふ	一三三	山の村	一六三
『ミューズたちの散歩』	一三三	山と海	一六四
自動書記	一三三		

農村雜感	一六
山村拾記	一七
雪積む夜	一八
海の話	一九
谷地の印象	二〇
稲の花	二一
エトランゼエの記	二二
旅の手帖から	二三
つかのまの光	二四
旅の手帖から	二五
流離不遇の詩人	二六
詩人の船旅	二七
税関と英語	二八
孤 独	二九
雪と山菜	三〇
山の南瓜	三一
かもめ	三二
鹿	三三

一六	一七	一八	一九	二〇	二一	二二	二三	二四	二五	二六	二七	二八	二九	三〇	三一	三二	三三
----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----

エッセイ III

相撲の魅力	三三
アテ字の世代	三四
おりえんたる・のいず	三五
子供の表現	三六
曲りかどについて	三七
李ライン	三八
鮎(アユ)	三九
甲子園所感	四〇
スキヤキ	四一
むすめ三題	四二
ABCの關係	四三
中秋無月なりき	四四
食べる	四五
文明の裏戸	四六
前衛芸術	四七
あすをたのむ心	四八
ひとりの道	四九

三三	三四	三五	三六	三七	三八	三九	四〇	四一	四二	四三	四四	四五	四六	四七	四八	四九
----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----

黄金の時間
 雨について
 酒
 炉辺ばなし
 知己と公衆
 絵にかいた自由
 感心出来ない
 宣伝・遅配
 家は一代
 親ごころ
 クラス会
 学生デモに思う
 明るいメーデー
 「解らない」の答
 相撲のころ
 はまゆうの鉢に思う
 一つ一つの花
 鈍感な所業
 総不安の夜

三六
 三九
 四〇
 四一
 四二
 四三
 四四
 四五
 四六
 四七
 四八
 四九
 五〇
 五一
 五二
 五三
 五四

こども二題
 十月某々日
 詩と季節
 講演というもの
 京都一泊
 西の京・東の京
 あとり
 海の文学
 多米町蟬川33番地
 朔太郎のアフォリズム
 山形のこと
 某日 米客
 私と詩友
 私の明治
 評論 I
 オトギバナシ文学の擡頭
 わかつてること
 シュウル・レアリスムとは

二五
 二六
 二七
 二八
 二九
 三〇
 三一
 三二
 三三
 三四
 三五

安西冬衛氏の詩に就いての

わが ALPHABET.

感想片々

若き友への手紙

詩の泉

詩を支へる者

詩と風懷

詩人の悲劇

私の詩作法

詩人の当惑

現代詩のレトリック

俳句のヴァイブレエション

近ごろの詩壇

詩人の反省

詩は駆け去る？

表現について

某月某日

作家の貌かたち

作詩と作詞

人生の中の詩

曲と詞

詩の鑑賞法

海で書く海の詩によせて

詩というもの

評論 II

詩に就いて

梶井基次郎著『檸檬』に就いて

ユーモラスな面影

祝辭

冬彦流涕

第二次元の夢

辻野・中原二友を悼む

詩の中に

青春について

青春悔いあり

百田宗治の詩

晩年の萩原さん

三三九

三八〇

三八一

三八五

三八八

三九五

三九六

三九八

四〇〇

四〇一

四〇二

四〇四

四〇五

四〇六

四〇七

四一〇

四二〇

中原中也の詩について	四二四
三好達治論	四二六
三好君のこと	四三〇
その頃の三好君	四三三
『四季』のころ	四四〇
忘れがたい風姿	四四三
詩人と奇術	四四五
三好君のこと	四四六
三好達治と中原中也	四四七
返せない負債	四六三
マイナー・ポエツト 大木実	四六六
『四季』につどう詩人たち	四七〇
ふるさとの絆	四八一
シュペルヴィエルの詩	四八二
思っておすことなど	四八四
白井君と私	四八六
解説	四八九
編註	四九七

杉浦明平

小説

城

城が影を落したとある湖の邊で、子どもの一人が語りだした。

——あの城の幾重にも襖を距てた奥の間には、お城主さまが白羽二重の蒲團を重ね、終日終夜昏々と眠つてゐる。曙が來ても夕暮が訪れても、その眠りは未だに覺めたためしがない。だが或る夜星があの湖の彼方にずり落ちて、人々が残らず眠り痴けてゐた眞夜中どき、お城主さまが不圖眼を覺したことがあつた。お城主さまは高い天守閣の頂から、金欄の裳を引き摺り乍ら、七階の階段をば搖り動かしてがたり、ごとりと一段づゝ降りて來た。その音が廣いお城の屋根瓦を悉く鳴り震はし、その響が復眠つてゐる國中に響き互つた。髪が蓬々として眞白な箒木のやうに倒に立ち大きな顔が眞青な燐のやうに燃えてゐた。だが、人々は誰一人としてそれを見たものはない。お城主さまが何故あの高いお城の絶頂から降りて來たか、お前は夫れを

知つてゐるか。夫れはあの城のお花畑のまん中に在る子どもの湧いた古井戸の水を呑みに來たのだ。聽てその水を呑んで了ふと、お城主さまは復もやがたり、ごとりとあの城の階段を踏み轟かし、高い高い空の方へ登つて行つた。それから二度とそのお城主さまは下へ降りてきたことがない。だが今でもあの城の奥の襖の蔭にはお城主さまが眠つてゐる。若しその姿を見た者があつたならば、その人の眼は忽ちつぶれて了ふといふことだ。だから日が暮れてから決してお城へ近寄つてはいけなと、お母さんが謂つてゐた。

するともう一人の子どもが語り出した。

——いゝえ違ふ。あの城の天守閣の頂上にはお城主さまはもう居ない筈だ。城を護つてゐた武士たちも、もう百年も二百年も前に死んで了つた。今ではあの傾いた城に誰が住まはう。だが、あの城の森の奥には魔のやうに年老いた鷹が棲んでゐる。若し空が硝子のやうに晴れ互つてゐる日に、子供達が石垣の椽に遊んでゐると、頭の上に鬱々とした翳が射し、何處からとも無く舞ひ下つたその鳥が風のやうに子どもの瞳をば引き抜いてゆく。だから晝間でもあの城に決して近寄つてはいけなと、お父さんが謂つてゐた。

——いゝえ、違ふ。

と最初の子どもが復言つた。

——お城主さまはお城の頂から降りて來たのに相違がない。此の湖の底がこんなに浅いのは、其の時お城主さまがあゝの井戸の水を呑み干したからだ。何故と謂ふなら、あの井戸の水は此の湖の底に續いてゐるのだから。

——いゝえ違ふ。

あとの子どもが斯う言つた。

——此の湖の底が浅いのは、お城主さまがその水を呑み干したためではゆめゆめない。夫れは、此の湖の底に沈んでゐるあの鷹に攫はれた澤山の子どもの眼の玉が、絶えずその水を吸ふからだ。

これを聞いて先の子どもが復叫んだ。

——いゝえ、違ふ。

するとあとの子どもも復叫び返した。

——いゝえ、違ふ。

それから、此の二人の子ども達は互に負けず劣らず際限も無く罵り始めた。ところが丁度此の時高い空の方に當つて出し抜けに「喧しい!!」と鳴りはためく凄まじい聲がした。見ると子どもたちの背後のどんより

と曇つた空に、巨大な城が怏鬱な頭を擡げ、水に映つたその薄暗い影が風も無いのにゆらゆらと搖れてゐた。それを見ると子ども顔の色は遽かに變り、一様に、啞のやうに黙つて了つたが、何思つたか、靜かにその着物裾を捲き上げると青い色のお臀を二つ並べて、抜き足差し足おづおづと湖水をば渉り初めた。凝つと見てゐると、水鳥のやうなその姿は、微かな音を立て、段々と水際をば遠ざかり、永い間遠方の淺瀬に婆娑とした影を引いてゐたが、その影も次第に薄くなり、やがて遙かに陽のうるみ滲んだ水の涯に、怏鬱として聲も無く消え行つた。

夢を見ない人

奥さんは云つた。

——わたし、夜眠れなくて弱つてゐる。やうやくうつうつしたと思ふと、夢ばかり見て——。それがへんなのばかりだ。神經衰弱よ、こんなの永く續いたら病氣になつちまふくらゐ……………

——だれだつてさ。時候のせるだよ。

その夫なる人は口を添へた。あなたはどうか？ と話
はこちらへ廻つてくる。あなたなんかたぶんそんな格
好でもない、仰言いますのですか？

——ハハ、Q君か。君は見えないよ、きつと。ね、見
ませんね。

——まあ、ねるとおきるとは一緒ですな、いつも。
このおれの嘘つき奴。おかげで明方見た、ビルディ
ングの屋根からのめつたやつまで忘れかけてゐた。

——さうだらうともさ。

でも、S氏は頷いてくれる。

——羨ましいわね。

奥さんのこえは冷かしに變つた。

——だが、このごろの人はみんな夢ぐらゐ見るよ。
夢を見ることが近代人の資格さ。

S氏の眼は奥さんの手に向いてゐる。その手は眼鏡を
拭いてゐた。

——ぢや、拙者はさしづめ古代に屬すかな。

——さうとも。でなくつて、いまどきそんなに遠慮
なくフレールもんか。たしかに時代物さ。

さやう、Q君はアンチ、モダンだ。古代だよ。

S氏はのけぞりながら恬として云つた——が外へ出
て、ハハハと私は笑つてしまつた。そんな夜も眠れ
ない世の中で、のうのう肥れたり夢も見なかつたりし
たら、それこそ疑ひないモダン適性じやないか、とさ
う思つたからだ。なほ疑ひものであることが、私を嬉
しくした。で、ケースをさぐると巻タバコに火を點け
た。そして一口吸つてハツとした。

Please Kindly Refrain From Smoking

満員の省線電車の中だつたのである。

汗の出る話

1

ふと通りがかりに、S君の働いてゐるトタン屋根の事務室を思ひ浮かべた。きなくさいアスファルトの舗道を逃れて、つきあたりのドアの把手に手をかけると、やあ、といふ聲が中からした。來客かな、と躊躇しながらも押せばそれらしい影はなくて、片頬に疊の目の迹をつけてむつくり起きあがつたのが、サル股一つのその人だつた。いきなり——へんなことがあります、いま眼を瞑つてたんだが不思議に君の來るのが遠くから判つてね、そのタバコ屋の角を曲つてどぶ板を踏む音がしだいに高くなるので、ハハアと思つたとたん君が立つた、と云ふ。笑はうと待つてゐたのも暑くなりさうで止めた。

坐らうとすると椅子の背を掴んでひきまはしてくれ、手巾を出さないうちに團扇を抛つてくれたが、また立

ちあがつたので、マツチなら——とかくしへ手を入れかけたら、心得て灰皿だけ持つてきた。それでもう油に漬つたやうになつたが、すぐ言葉をついで——ねえ君、柱の横にスキツチに似たものがとり付けてあつて、ひねると部屋の中が急に暗くなる、同時にパチパチとフキルムを廻す音がして、海の色にかはつたぐるりの壁の面をゆらゆらサカナが泳いだりしたら……と汗の引込むやうなことを云つた。かと思ふと、椅子の脚を傾けて壁に手を伸したので、ほんとうに何かするのかと見てゐると、とまつてゐた蠅を掠めとつて、翅をもいだ奴を机の上に歩かせてゐた。

2

何もかも五月蠅くなつて、あの中に隠れてたらいいだらう、と云へばニヤリと擦つたさうな顔をした。頗で指した店の隅の床几に一揃ひの甲冑が腰をおろして、薄闇の中からいつも咲つたやうな漆塗の面を光らしてゐた。つぎに訪ねたとき、据へてあつたそれがすつくと立ちあがつた。同時に面の裏で鼻にかかる聲がして、やあ失敬、いまちよつと這入つてゐたところだよ、中は涼しくて存外樂です、といふやうなことを喋つてゐ